「100年企業顕彰」第1回贈賞式

100年経営の会

中部経済産業局長賞

あいや（愛知・西尾市）選定

100年経営の会（事務局＝日刊工業新聞社）は「100年企業顕彰」を創設し、第1回の贈賞式を1日、名古屋市中村区のザサイプレスホテルメルキュールで行った。中部経済産業局の後援を受けて開催したもので、中部局管内から50社あまりの応募があり、審査の結果抹茶製造で知られる、あいや（愛知県西尾市）が大賞に当たる中部経済産業局長賞を波多野淳彦中部経済産業局長から受賞した。このほか100年経営の会会長賞3社、日刊工業新聞社賞4社、優良100年企業表彰15社を決定し、贈賞した。

受賞する杉田あいや社長㊨

来賓あいさつ

中部経済産業局長 波多野 淳彦 氏

受賞された皆さまはいずれ劣らぬ優れた企業理念を持ち、伝統を守りながら新技術・新商品を開発し、新しい顧客を開拓し、人材育成にも力を入れている。自社の発展だけでなく地域経済・社会にも多大な貢献をされている。この100年はさまざまなことが起きたが、受賞各社はそれを乗り切ってきた。さらに今後100年も一層発展されることを願っている。

地域経済・社会に多大な貢献

あいや 抹茶で食品加工市場開拓

グローバル展開・革新性評価

創業100年以上の優秀な長寿企業について内外に情報発信しようと始めた顕彰事業で、まず今回は中部経済産業局の後援により、愛知、三重、岐阜、石川、富山の5県に本社を置く企業について募集した。事業の継続性を重んじる一方で経営革新に取り組んでいること、優れた経営理念を持っていること、雇用面や社会貢献活動などで地域に貢献していることなどを加味し、波多野淳彦中部経済産業局長、北畑隆生100年経営の会会長、後藤俊夫日本経済大学経営学部長（同会顧問）らが中心となり審査した。今後全国各地での開催を予定しており、あいさつした北畑会長は「地方発の顕彰事業を発展成長させるのは地方創成の時代にふさわしいこと」とした。また事務局側から、ちょうど前日に創刊100周年を迎えた日刊工業新聞社の井水治博社長もあいさつした。

地方発の顕彰 今後も展開

あいやは創業1888年。茶と藍の製造・卸から事業を始め、食品加工用原料としての抹茶市場を1960年代以降いち早く開拓し、グローバル展開も進めている革新性が評価された。

贈賞式後は懇親会を催し、今回の受賞企業中、最も長い歴史を持つ岡本・ナベヤグループの岡本太右衛門会長の乾杯発声で、さまざまな業種の長寿企業が交流を深めた。

受賞企業

受賞企業は次の通り（各賞とも応募受け付け順）。

≪中部経済産業局長賞≫
あいや（愛知県西尾市、創業1888年〈以下創業年〉、抹茶など茶類の製造販売）

≪100年経営の会会長賞≫
岡本・ナベヤグループ（岐阜市、1560年、鋳物製造・精密治具など）、岡谷鋼機（名古屋市中区、1669年、鉄鋼・機械などの商社）、井村屋グループ（津市、1896年、菓子・食品の製造販売）

≪日刊工業新聞社賞≫
ウチキ（石川県加賀市、1888年、漆器製造販売など）、松本義肢製作所（愛知県小牧市、1905年、義肢・装具・車いすなどの製造販売）、イビデン（岐阜県大垣市、1912年、電子部品・フィルターなど）、九鬼産業（三重県四日市市、1886年、ゴマ油・食品ゴマなどの製造販売）

≪優良100年企業表彰≫
渡邊工務店（愛知県飛島村、1907年、住宅工事・ビル施工）、鶴弥（愛知県半田市、1887年、粘土瓦の製造販売）、廣貫堂（富山市、1876年、医薬品・医薬部外品などの開発・製造販売）、シブヤパイピング工業（名古屋市中区、1910年、給排水など総合設備工事）、アピ（岐阜市、1907年、健康補助食品・医薬品の受託製造など）、イセオリ（三重県松坂市、1889年、ガラス繊維製品などの製造加工販売）、福田刃物工業（岐阜県関市、1896年、工業用機械刃物・治工具などの製造販売）、後藤木材（岐阜市、1889年、木材など住宅資材販売・工事）、オークマ（愛知県大口町、1898年、NC工作機械・NC装置・FA製品などの製造販売）、兼房（同大口町、1896年、工業用機械刃物・工具・機械などの製造販売）、東邦地水（三重県四日市市、1900年、地質調査・地中熱利用システムの設計など）、坪井利三郎商店（名古屋市中区、1902年、屋根外装の企画設計施工など）、宮崎本店（三重県四日市市、1846年、清酒・焼酎・みりん・ウイスキーなど酒類の製造）、津田駒工業（金沢市、1909年、繊維機械・工作機械の設計製造）、永田染工（岐阜市、1873年、染色加工）

世界の食品安全基準クリア

「丈夫が一等や」「本業を忘れるな」「本業から離れろ」

あいや社長 杉田 芳男 氏

贈賞式で受賞者を代表してあいさつに立った杉田芳男あいや社長は、伝承されている社訓を紹介した。まず三河弁で健康第一を呼び掛ける「丈夫が一等や」。そして「本業を忘れるな」「本業から離れろ」という一見相反する意味深い言葉も披露した。贈賞式・懇親会に続いて参加者は愛知県西尾市の、あいや本社を訪問して工場見学。自動化されているものの茶臼でひく抹茶の製法は伝統を受け継ぐ手法。抹茶が国内外のさまざまな食品の加工原料として使われていることについての説明にも聞き入った。

抹茶は800年ほど前、中国から日本に伝わったが当時は漢方薬の一種だった。その後室町から安土桃山時代にかけて新しい茶の礼式がつくられる。

当社は屋号にあるように藍の製造卸業を営んでいたが昭和初期にドイツから化学製品が入ってきて国産品は押され、茶に傾注するようになる。これが最初の危機だったろうか。

西尾は温暖で肥沃な土地に恵まれ、茶臼に用いる御影石の産地・岡崎に近く、大消費地で茶の文化もある尾張名古屋があるといった理由で抹茶産業が発展した。ただ、宇治茶に比べればたかだか百数十年の歴史しかない。茶業界としては新参者で、なかなか使ってもらえない悩みもあった。

昭和40年代、父の代だが加工用原料として食品業界に進出した。西尾の抹茶は色彩が明るく、名古屋は食品業界が発展している。しかし、食品業界は茶業界と比べて品質基準などがはるかに厳しい。そこで私たちも品質管理部を新たに設け、安全・安心・信頼に向けて一層真剣に取り組むことになった。今では菓子をはじめさまざまな食品向けが売り上げの9割以上だ。世界各国の食品安全基準をクリアし、海外の売り上げも4割を超えている。

しかし、不易流行というが、変わらないものもある。直径1尺1寸の茶臼を反時計回りに毎分55回転させて1時間に40㌔をひき、5㌔から10㌔の微粉末の抹茶をつくる。なぜかわからないがこの製法しかない。1000台の茶臼を保守する目立って職人は、40年以上の経験を積んだベテランのもと、若手が変わらぬ技を学んでいる。また4月末から茶の木に黒いネットをかけ太陽光を95%以上さえぎることで、光合成をしようとする茶葉がひろがって成長する。これでタンニンを押さえ、独特の覆い香のある茶を栽培する。この手法も昔からまったく変わらない。

あいや本社・工場見学で説明を受ける参加者

創業以来「和・英知・情熱で、新しい市場に挑戦する精神」を守ってきた。伝統を守りながらも不断の革新を続けてきたつもりだ。社員みなで考えた企業理念「和の心を重んじ、リーディングカンパニーの誇りを胸にひとの未来を創造する」を心に刻んでいる。

ブームとまでは思わないが海外でも抹茶は受け入れられている。ドイツではハーブティーと同じようにたしなまれているし、どちらかというと保守的な米国の東海岸でも注目を集めるようになってきた。中国市場の開拓も進んでいるところだ。また、スイーツ市場を狙った新しいブランドも立ち上げているし、抹茶の原料となる碾茶の有機栽培はこれから必ずひろがっていくと思う。私は挑戦という言葉が好きだ。

モノづくり推進会議
超モノづくりへの挑戦

「モノづくり日本会議」は、2007年9月に設立した「モノづくり推進会議」での活動を土台に、広域企業ネットワークや他機関との連携を活用し、日本のモノづくり産業の強化に役立つ実践的な勉強会・シンポジウムなどのイベントや交流会などの活動を展開しており、日刊工業新聞社が事務局を務めさせていただいている団体です。

少子高齢化、環境対応、資源・エネルギー問題など様々な課題を乗り越え、「“超”モノづくりの推進」をテーマに、事業を進めております。これまでの取り組みを発展・拡充させるとともに、IoTやAIを含めたロボット産業や「防災イノベーション」など、横断的テーマについては、より実践的な成果を目指します。

先進的な技術やノウハウを有する会員企業をはじめ、多彩な連携機関のご協力をいただき、モノづくり産業のさらなる発展を目指して事業を展開し、モノづくり産業の競争力強化につながるよう、地域間、企業間連携をおこない、ビジネスマッチングなども図っていきます。

モノづくり日本会議の事業

「グローバル競争力強化関連事業」
■モノづくり力徹底強化検討会
■人材育成関連事業
■長寿企業イノベーション勉強会
■価値創造型サプライチェーン検討会

「新産業・ビジネス創出／ビジネスモデル構想力向上検討事業」
■ネイチャー・テクノロジー研究会
■新産業創出検討会
◇新産業技術促進検討会
◇農商工連携勉強会
■ロボット研究会
◇ロボットビジネス 2020

その他の事業コンテンツ
■交流・マッチング事業
■顕彰事業　モノづくり部品大賞
■モノづくり推進シンポジウム
■特別講演会
◇防災イノベーション
■地区別研究会
◇中部地区研究会

各事業の詳細は、モノづくり日本会議ホームページ（www.cho-monodzukuri.jp）をご覧ください。

●お問い合わせ先● モノづくり日本会議事務局 〒103-8548 東京都中央区日本橋小網町14-1（日刊工業新聞社内） Tel: 03-5644-7608 Fax: 03-5644-7209